三重県護国神社奉賛会報
第七十九号

御英霊遺徳顕彰祭

―平成二十三年度―三重県護国神社奉賛会総会開催

平成二十三年十月二十七日の午後一時より役員会、午後二時より拝殿に於いて「御英霊遺徳顕彰祭」を斎行。乙部会長を始め役員、会員等が参列のもと、御英霊に感謝の誠を捧げた。

祭典終了後、南参集室に於いて総会を開催。会長の挨拶の後、西場理事が議長となり議事を進め、前年度の事業報告及び決算・本年度の事業計画案及び予算案等議案はすべて異議なく承認された。

終わりに当たり、原宮司が挨拶を述べ、総会を終了した。

春季例祭に参列しましょう

春の例祭が四月二十一・二十二日の両日に斎行されます。

御英霊の遺徳を継承し、広く世に顕彰するという意味においてもご遺族・崇敬者の枠を超え老若男女の県民が挙って参拝する事が望ましい事です。

是非お誘い合せの上、ご参列下さいます様ご案内致します。

尚、駐車場がありませんので、公共交通機関をご利用下さい。

（折り込み参列証参照）

《御悔み》　元奉賛会常任理事を務めて頂いた内田和夫氏が旧臘お亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈りいたします。

会費納入のお願い

『平成二十三年度』（平成二十三年九月一日～翌年八月三十一日迄）の会費未納の方は会費の納入をお願い申し上げます。

尚、納入の際は奉賛会専用の振込用紙をご利用下さい。

※送金手数料は奉賛会で負担いたします。

年度会費　正会員　二千円
特別会員　一万円

奉賛会入会のご案内

奉賛会は護国神社の御英霊を恒久的に奉慰奉賛していく事を目的とし結成され、多くの方々よりご賛同を賜って参りましたが、会員数が年々減少しているのが現状です。

そこで、一般有志の方の入会を進め、会員の増加を図りたく、会員よりのご紹介を宜しくお願い申し上げます。

入会ご希望の方は直接神社へお越し頂くか、奉賛会事務局までお知らせ下さい。

三重県護国神社内　奉賛会事務局
☎〇五九―二二六―二五五九

―― 英霊の言乃葉 ――

一緒に食べて下さい

陸軍大尉　横山　善次　命

陸軍特別操縦見習士官二期
昭和二十年八月十三日歿
茨城県出身　二十二歳

私は突然征く事になりました。何も言ひ残す事は有りません。只戦が勝まで頑張つて下さい。充分健康に注意して……。

私は必ず立派に目的を達成します。私が今迄只本当に御両親様に御世話になり、又数々の御心配をおかけした事は御許し下さい。今迄御両親には何とかして安らかな生活をさせたいと思つて居りました。それも出来ませんでした。愚人の空想でした。

ホンノ少しでは有りますが、このトランクに入つて居る品、私が一生懸命にためたものです。食べたかつたのを食べずにためました。

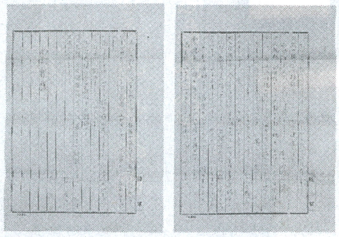
大きな箱の中に入つて居る清酒其の他の品は、七月三十日、出撃準備命令と同時に出撃者のみ頂いたものです。生罐等皆様と一緒に食べたかつたのですが、それも出来ませんでした。本当につまらぬものばかりですが、これが私の最初で最後の心からの品です。箱の中の品は私の写眞と一緒に食べて下さい。（中略）

では皆様、充分健康に注意され、最后まで頑張つて下さい。私は立派にやります。

さやうなら

【平成十五年八月　靖國神社社頭掲示】

英霊の言乃葉（9）より転載



出撃直前に鉛筆で走り書きされたご両親宛の「絶筆」

【解説】

横山善次命は昭和二十年八月十三日、特別攻撃隊「第二〇一神鷲隊」隊員として、二式複座戦闘機「屠龍」に搭乗、那須野基地を出撃、犬吠埼東方洋上の敵機動部隊に突入（索敵機により戦果確認）、戦死。

終戦のわずか二日前。横山少尉は生まれて初めて故郷水戸の空を飛んだ。この日、那須野基地は敵艦載機の空襲で出撃直前の特攻機に甚大な被害を受け、稼働機はわずかに屠龍二機。この屠龍で僚機と共に離陸した横山少尉は地元の地理に詳しいので先導して、末弟充孝（当時十歳）の疎開先大賀村を経由、水戸の実家の上空を旋回して別れを告げたが、この陸軍最後の特攻となった飛行コースは充孝と継母千代が覚えている。

その日の夕方、ため池に鯉をとりに行った充孝が、ふと顔を上げると二機の双発機が並んで飛んでゆく。手づかみで十匹もとれたこと、またあくどくて食べられなかった鯉こくの味のこと、ともに忘れないという。

水戸では敵艦載機による機銃掃射の後だったので、千代や町内の人達は外に出て空を見ていた。そこへ屠龍の二機編隊。久し振りに見る日の丸機に皆手を振った。それに応えるかのように少尉は上空を数回旋回した後、艦載機の去った方向に消えていった。

八月八日、横山少尉は最後の帰省をする。朝一番の汽車で東北本線黒磯駅を出発し、小山経由、水戸線で約三時間半の行程である。

八月二日の空襲で焦土と化した水戸の街。幸い少尉の家の一画だけが焼け残っていた。家の中は何一つ変わっていなかった。また、数日前に郵送した遺書（八月三日付）も空襲後の混乱で未着だった。そのため涙の別れとはならず、いつも通りの家族的な雰囲気のなかで両親と語り合うことができた。

二時の汽車で帰る予定が四時になり、七時になった。少尉だけが知る今生の別れ。自分の家を心ゆくまで味わい、両親といつまでも話したかったのであろう。しかし、帰らなければならない。

少尉は父に玄関先でお別れを告げ、母と並んで外に出た。母は水門橋まで見送った。「それじゃ、お母さん。僕はいきます」橋の袂で立ち尽くす母に、少尉は何度も何度も振り返って去って行った。

あれから五十年。千代さんの脳裏に焼き付いて離れないのは、少尉の軍服にはおよそ似合わない、あの時の子供っぽい動作ではある。

【散華の心と鎮魂の誠より転載】